

ミュージアム・アイズ

Vol.55
2010

MUSEUM EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

特集

玉
の

埴
輪

二〇一〇年度明治大学博物館特別展

—玉里舟塚古墳の
埴輪群—

- 博物館ニュース
- 展示&リサーチ
- 市民レクチャー
- 学芸研究室から
- 収蔵室から

ことわざワールドへようこそ—「時田昌瑞ことわざコレクション」と明治大学—
近代史料にみる旧藩主内藤家と延岡
激動の陶磁器市場
江戸時代の測量術—「地方測量之図」の紹介から—
平城宮の軒丸瓦

- 南山大学協定通信・図書室から
- 入館者数の動き・団体見学の記録・M2カタログ
- 博物館友の会から 弥生文化研究会—楽しみながら弥生を学ぶ!—

明治大学博物館

王の埴輪

—玉里舟塚古墳の埴輪群—

茨城県小美玉市にある玉里舟塚古墳は、1965年から5次にわたって明治大学の大家初重先生と小林三郎先生を中心とした明治大学考古学専攻の調査団によって発掘調査され、特殊な二重の箱式石棺と大量の埴輪が出土した古墳時代後期(6世紀)に築造されたと考えられている古墳です。埴輪は大型かつ多彩で、関東を代表する埴輪のひとつとして知られています。近年明治大学博物館が行った再整理の結果、横座り方式の乗馬の存在を示す馬や柱付の家、特殊な線刻を施した円筒埴輪などの存在が明らかとなり、まさに「王」の埴輪ともいえる豊富な内容をもつことが分かってきました。また、周辺の古墳の調査により、舟塚古墳の埴輪は前代の古墳とは大きさ、製作の方法とも全く異なる革命的ともいえる存在であることがわかってきました。



墳丘東側の埴輪列。ほぼ立てられた当時の位置から検出された。

過去の調査と埴輪

玉里舟塚古墳は小美玉市上玉里に位置し、霞ヶ浦北岸の標高24m前後の台地状に築かれた全長約72mの前方後円墳です。調査の結果、後円部墳頂に埋葬施設があるほか、前方部西側には造り出しが存在しました。副葬品は残念ながら大半が盗掘されましたが、調査で馬具・武器・武具・装飾品が検出されたほか、盗掘時に持ち出されたと思われる資料が茨城県立歴史館に収蔵されています。埴輪は墳丘や西側の堀の中から大量に見つかり、中にはほぼ元の位置を保った状態のものも発見されました。円筒埴輪は85cm程度の大型ものが主体で、ほぼ全てが6本の横方向の条(突帯)をもつスタイルで統一され、きわめて規格性の高いものです。最上部が壺のような形をした朝顔形円筒埴輪は120cmを超えるものもあり、霞ヶ浦北岸地域の前の世代の埴輪と比べると倍近い大きさのもので、円筒埴輪とあわせ約



全高1mをこえる入母屋造りの埴輪
壁面には関東特有の横木表現が見られる。発見時には、青・赤・白の色彩が確認できたという。明治大学博物館蔵

650本が古墳の周囲を巡っていたと考えられています。さらに注目されたのは人物や家などの形象埴輪で、造り出し付近で集中して見つかりました。調査前に明治大学に寄贈されていた入母屋造りの家形埴輪は103cmで、関東でも屈指の大きさです。千木や堅魚木が表現された王の住まいにふさわしい立派な建物を表現しています。このほか、武人と巫女、王冠をかぶり鞞(矢を入れる武具)を背負う男、盾持ちなどの人物埴輪の存在が知られ、上半身と下半身を分離して製作する特殊な技法や、切れ長の目と高い鼻の表現など端正な顔の造形を行っている点などが注目され、埴輪を研究する上で重要な資料として全国的に知られてきました。しかし、コンテナ約200箱分の埴輪片の復元が調査以来残されたままとなっており、埴輪祭祀や地域史を明らかにする上で欠くことのできない資料として、その実態の解明が長らく期待されていたのです。



玉里舟塚古墳の円筒埴輪
突帯は通常2~5本が主流だが、全て6本で統一され、大型である。外側をハケ、内面を指でなでて仕上げる点も共通。明治大学博物館蔵

新たに復元された埴輪



帽子をかぶる男子
切れ長の目と高い鼻が玉里舟塚古墳の人物埴輪の特徴。明治大学博物館蔵

茨城県立歴史館の協力を得て行った再整理の結果、様々な埴輪の存在が明らかになりました。まず特筆されるのが馬形埴輪です。少なくとも3個体以上あり、うち2個体は横座り方向の乗馬方式を示す横板を鞍に取り付けていることが判明しました。こうした例は全国でもわずかで、完全に復元できたものは非常に貴重です。このほか、家形埴輪はさらに2個体あり、うち1個体は円柱のみで屋根を支える高床のような珍しい構造であることが分かりました。人物埴輪では帽子を被る男子や顔に彩色を施す男子、武具を表現した下半身などが加わりました。また、まわしを表現した人物



横座り方式の乗馬を示す馬形埴輪
右側の鞍に足を置く板が付く。明治大学博物館蔵

物の下半身が復元され、力士埴輪の存在が明確になりました。加えて、複数の女子の髻や鷹匠の鷹の部分と思われる鳥形土製品などから、武人偏重ではない多彩な人物埴輪群であることが明らかになってきました。さらに、全国で唯一の棒状の武器を構える武人埴輪として著名な「槍を持つ武人」が持っていたと思われる武器形土製品が、刃を多面体で表現した鉾であることが確認されました。鉾は数ある古墳の副葬武器の中でも希少で、象徴的な意味合いを感じさせる武器ですが、本例によってさらにその特殊性が裏付けられたといえます。このほか、円筒埴輪でもこれまで知られていなかった「×」印の記号をもつものや、斜格子の文様をもつものなど、製作集団の解明につながる可能性のある資料が復元されています。

玉里舟塚古墳の被葬者像

埋葬施設の調査では、ガラス小玉、銀製空玉、細かな文様が施された銀製主頭大刀柄頭片、鉄鏃、金銅製の縁金を持った黒漆塗の鞍、よろいの部品などが確認されています。また、茨城県立歴史館所蔵の伝玉里舟塚古墳出土資料には、金銅装双龍環頭大刀や銀装大刀、複数の大刀や大量の鉄鏃のほか、馬具、金銅製の装飾品などがあり、相当な副葬品を有していたことをうかがわせます。被葬者である玉里舟塚の王は、豪華な副葬品を持ち、なおかつ先端の埴輪祭祀と高度な技術で生産された埴輪を大量に揃えることができた霞ヶ浦北岸に君臨した人物であるといえます。

今回の展示では、明治大学博物館と茨城県立歴史館と小美玉市玉里史料館、古墳の所有者である山内氏宅に分散収蔵されている埴輪群及び伝玉里舟塚古墳資料も含めた副葬品など計約400点にも及ぶ膨大な資料を初めて一堂に集め、霞ヶ浦北岸に君臨した「王」の実像に迫ります。



伝玉里舟塚古墳出土の金銅装双龍環頭。茨城県立歴史館蔵

2010年度明治大学博物館特別展 王の埴輪 —玉里舟塚古墳の埴輪群—

- 主催：明治大学博物館・明治大学考古学専攻
- 後援：茨城県立歴史館・小美玉市教育委員会
- 会期：2010年10月9日(土)～12月12日(日)会期中無休
- 会場：明治大学博物館特別展示室
- 開場時間：10:00～17:00(入場は16:30まで)
- 入場料：300円(明治大学学生・教職員・高校生以下の生徒児童・明治大学カード会員、リバティ・アカデミー会員・明治大学博物館友の会会員・愛の手帳・身体障害者手帳をお持ちの方は身分証・会員証・手帳の提示で無料)
- お問い合わせ：博物館事務室 03-3296-4448

◆公開講座

明治大学リバティ・アカデミー、明治大学博物館主催 第48回考古学ゼミナール

「玉里舟塚古墳から見た古墳時代の王権」

講座概要: 博物館特別展「王の埴輪—玉里舟塚古墳の埴輪群—」開催に関連して、今回明らかになった茨城県小美玉市玉里舟塚古墳の実像と、そこから描き出される古墳時代の王権の姿について考えます。玉里舟塚古墳は、赤色顔料によって内部を真っ赤に彩られた特殊な二重の箱式石棺をもち、さらに墳丘には前代の製作技術をはるかに超えた大量かつ精美なつくりの埴輪を並べていました。再整理の結果、これまで知られていた以上に豊富な内容の埴輪群であることが明らかとなり、加えて周辺の古墳の調査の進展により、玉里舟塚古墳の埴輪は前代と一線を画す革命的な変化をもたらした存在であったことも分かり始めました。その背景には、近畿との政治的な関係も推測されます。今回の講座では、埋葬施設と副葬品の検討も交えながら、埴輪の全容と地域での展開、大王墓の埴輪との比較を通じ、玉里舟塚古墳の被葬者像と政治的な位置付けについて探ります。



■回数: 全5回(毎週金曜日 18:00開催)

■受講料: すべてを受講して5,500円 定員: 200名

- 10月8日 第1講 大塚初重(明治大学名誉教授)
「玉里舟塚古墳の調査と埋葬施設」
※開幕記念講演を兼ねるため、初回のみ 14:00～16:00
- 10月15日 第2講 忽那敬三(明治大学博物館学芸員)
「よみがえる玉里舟塚古墳の埴輪」
- 10月22日 第3講 本田信之(小美玉市玉里史料館学芸員)
「霞ヶ浦北部の古墳と埴輪」
- 10月29日 第4講 高橋克壽(花園大学文学部准教授)
「大王墓の埴輪と玉里舟塚古墳の埴輪」
- 11月5日 第5講 佐々木憲一(明治大学文学部教授)
「玉里舟塚古墳の〈王〉とは—古墳時代後期における玉里舟塚古墳の位置づけ—」



玉里舟塚古墳の後円部埋葬施設

公開講座についての詳細は、明治大学リバティ・アカデミー事務局 (03-3296-4423) までお問い合わせください。



西側くびれ部円筒埴輪列の出土状況

文化の日
子ども
講座

「はにわって何だろう？」

特別展開催にあわせ、実際の埴輪の洗浄体験などを通して埴輪とは何かを学びます。

- 日時: 2010年11月3日(水・祝) 14:00～15:30 参加費無料
 - 対象: 小学校3年生～6年生(原則として、保護者と児童のペアで参加)
 - 定員: 8組程度(最大16名まで)
- 10月9日募集開始 ※定員に達し次第締め切ります
詳細は、博物館事務局(03-3296-4448)までお問い合わせください。

南山大学人類学博物館との間で相互交流の協定書を調印

博物館ニュース

去る3月29日、南山大学人類学博物館との間で、事業交流に関する協定書の調印式をおこないました。近年、さまざまな分野で大学間交流が盛んになっていますが、明治大学では、中京圏の大学との間に交流を進めようという戦略があり、その一環として実現したのが今回の協定締結です。

考古学は明治大学の看板の一つですが、東海地区においてその名を知られるのが名古屋市の南山大学です。そして何よりも、同館の運営を担っているのが、明治大学考古学博物館学芸員であった人文学部の黒沢浩准教授という縁がありました。同館は、考古遺物以外にも人類学関係の資料や昭和戦後期の生活資料などを所蔵しており、考古学を通して共通の目線に立つと同時に、それ以外の分野においても新たな展開が生まれるのではないかと期待されます。初年度におけるその第一弾は、学術シンポジウムの開催（14頁参照）として実現しましたが、来年度以降の事業として交換展覧会の開催なども企画中です。

新生：明治大学黒耀石研究センター

博物館ニュース

長野県長和町に設置されている黒耀石研究センターは、文科省学術フロンティア推進事業「石器時代における黒耀石採掘鉱山の研究」（研究期間：2000年～2004年度）により建設された日本唯一の黒耀石と石器時代の研究施設です。2005年度からは、博物館分館として活動してきましたが、2010年4月より新たに明治大学研究・知財戦略機構付属研究施設に位置づけられました。合わせて、センター長、副センター長、センター員からなる研究組織が活動を始めています。センター長には小野昭特任教授、副センター長には会田進客員教授が着任されました。新生した黒耀石研究センターでは、中国・韓国・ロシアの黒耀石研究機関・研究者とのネットワーク構築をはじめ、黒耀石を含む「ヒト-資源環境系」研究を推進する拠点研究などが計画されています。黒耀石研究センターの今後の活動にご期待ください。



ハヶ岳山中に眠る冷山（つめたやま）の巨大黒耀石露頭（2010年8月9日踏査）

企画展

「古瓦を追って—前場幸治瓦コレクション—」開催しました。

博物館ニュース

7月30日（金）から9月12日（日）までの45日間にわたって開催された企画展「古瓦を追って—前場幸治瓦コレクション—」は、開幕前日の前場幸治氏による開催記念講演会を皮切りに、8月30日（月）に行なった山路直充氏（市立市川考古博物館学芸員）によるギャラリートークを行ない、合計3860名の来場者を迎えて好評のうちに閉幕しました。今回の企画展では、今年2月に前場氏から明治大学に寄贈された考古資料5400点、関連書籍1100冊のうち大半を占める古代から現代までの瓦を展示しました。文字瓦、金箔瓦、鬼瓦など日本の歴史に大きく関わった貴重な資料は来館者の関心をひき、中でも展示室中央の一際大きい金沢文庫の鬼瓦は多くの人が見入っていました。明治大学博物館と明治大学古代学研究所が明らかにする新たな歴史探訪の展示は、意義深いものとなりました。



展示室風景



金沢文庫の鬼瓦

ことわざワールドへようこそ

—「時田昌瑞ことわざコレクション」と明治大学—

山口 政信 (法学部教授・明治大学ことわざ学研究所代表)

1、縁は異なるもの

ことわざは、人の営みによって磨かれたことばである。歯切れよく短縮されたことわざには、暮らしという活動に育まれた言霊が宿っている。この意味において、「時田昌瑞ことわざコレクション」は、人の息遣いを視覚に訴え、〈生活とは生存して活動することである〉という、ことわざの精神性と身体性を呼び戻してくれる、貴重な展示会であった。

『時田昌瑞ことわざコレクション目録』⁽¹⁾に見る寄稿文のタイトルには、「収集品を嫁入りさせて」とある。森洋子明治大学

名誉教授と筆者が仲人役を果たせたのも、時田氏と共に「明治大学ことわざ学研究所」「日本ことわざ文化学会」で研究・普及活動を行ってきたご縁による。

2、温故知新

江戸時代の面白い絵の史料に出会った時田氏は、ことわざには視覚としての側面があることに気づいた、と言う。そして蒐集したカルタ、焼き物・織物・彫刻・鋳造物を手掛かりに、ことわざは「17音の俳句より短い言い回しで、森羅万象を言い表してしまう言語芸術である」と述べ、

以下のような見解を示している。この見解により、偏って理解されてきたことわざの本性が、日の目を見ることとなったことは注目に値する。

- ①ことわざは必ずしも教訓の言葉ではない。むしろ反倫理的なものすらある。
- ②個々のことわざが古くからずっと続いているものではない。
- ③現代生まれのことわざも稀ではなく、ことわざは今も新たに生まれている。
- ④ことわざは言語の領域にとどまらず、視覚化された文化だった。
- ⑤ことわざは庶民だけが使うものではなく、



いろはカルタ

貴族など上流階級も用いていた。

⑥ことわざは決まった形で伝承せず、形は長くなったり短くなったり、表現・意味の変化もともなう〈生き物〉だということ⁽²⁾。

3、負うた子に教えられて浅瀬を渡る

ことわざは、諺、言葉(ことばと出来事)、事業(しわざ・しごと)とも表記される。このことから、言と事は同源で、人はことばで考えるだけではなく、行動しながら考えるなど、ことわざには動詞としての主体性が存在することが示唆される。

ボラニーは、「知的であろうと実践的であろうと、外界についての我々のすべての知識にとって、その究極的な装置は我々の身体である。(略)我々が自分の身体を外界の事物としてではなく、我々の身体として感じるのは、このように我々の身体を知る知的な活動の装置として用いることによるのである」⁽³⁾と言う。

伝承ことわざに向けた関心の希薄化や理解力の低下現象は、身をもって経験する生活実感の不足がその誘因となっている。アクチュアリティのないところにリアリティが生まれえないのは無理からぬことであって、ここに「創作ことわざ」の存在意義を見出すことができる。

創作ことわざとは、柳田國男の「子供も諺をつくること」という諺研究カードに

触発された庄司和晃氏の造語である。明治大学では2009年から学部間共通総合講座に「ことわざ学入門」を独立させ、「創作ことわざ」の時間も組み込んできた。そこに見る学生の〈ことわざ地口〉や〈ことわざ物語〉といった創作品からは、理解するというレベルを超えた、メタ認知力が伝わってくるのは嬉しい限りである。

これは「瓢箪から駒」とも思える〈図〉であった。目を凝らせば、『『ことわざ』の原義は、のちの人によって考えられているように、ある種の言語作品そのものをさしたのではなく、その言語作品を制作する行為、あるいはその言語作品を用いておこなう行為(略)をさしたのである』⁽⁴⁾という、〈地〉が存在していたことに気づかされたのである。

ことわざは記憶するもの、という呪縛から解放された学生のレポートには、辞書を引いたとしか思えない、普及度の低いことわざも散見された。ここに〈ことわざ教育は創作から〉という逆転の発想が生まれたが、それはまさに「負うた子に教えられて浅瀬を渡る」であった。伝承ことわざと創作ことわざは、補完的存在であることが確認できたのである。

4、“ことわざ”といえば明大

「日本ことわざ文化学会」は、「明治大学ことわざ学研究所」と兄弟姉妹の関係

にある。この学会の設立主体者の多くが研究所のメンバーであることから、事務局を明治大学に置き、月例研究会や講演などの開催を続けてきた。

来たる11月27日(土)には駿河台校舎で学会大会を開くほか、これに合わせた図書も出版する。このような研究活動のほか、エコ・ファースト推進協会による「生き物にかかわる『エコとわざ』コンクール」の監修・審査・講演、文京区の市民プロデュース講座を設定するなどの普及・啓発活動をとおり、今や“ことわざ”といえば明治大学、との評価を得ている。

- (1) 時田昌瑞監修「時田昌瑞ことわざコレクション目録」明治大学図書館・明治大学博物館、2010
- (2) 時田昌瑞監修「常識として知っておきたいことわざ」幻冬舎、p.2、2002
- (3) M・ボラニー「暗黙知の次元」、紀伊国屋書店、p.32、2002
- (4) 金子武雄「日本の諺」(四)、海燕書房、p.21、1983



瓢箪から駒



中央図書館ギャラリーの様子

近代史料にみる 旧藩主内藤家と延岡

落合 弘樹 (文学部教授)

内藤家の近代史料

陸奥磐城平藩および日向延岡藩の藩主であった内藤家の文書は、明治大学博物館に保存されている。その全容は、『明治大学所蔵内藤家文書目録』によって知ることができ、また調査結果にもとづく研究書として、明治大学内藤家文書研究会編『譜代藩の研究』（八木書店、一九七二年）が刊行されている。

旧藩主家史料は、藩主が政治権力者であった近世が研究の中心となるのは当然といえるが、一方で近代史料は未検討・未整理のケースが多い。とはいえ、近年は文書整理の進展、史料公開の促進、自治体史編纂に伴う調査の進行により、旧藩主家の近代史料を素材とした研究が展開しつつある。

内藤家文書に関しては、幕末・維新时期という近代史の範疇に含まれる時期の史料のうち、家史編纂参考史料は整理済みで、市山幸作氏『延岡の父内藤政挙公』、河野弘善『西南戦争延岡隊戦記』、『宮崎県史』などに引用されているが、幕末期の膨大な風説書を含め、まだまだ研究の余地は残されている。そうしたなかで、これまで未整理だった近代史料の整理が2005年からすすめられ、仮目録の段階ではあるが、概要が明らかになりつつある。史料の多くには「家令局」の番号入りラベルが貼られており、内藤家の家政管理や実業の展開に関する情報を豊富に含んでいる。

最後の延岡藩主内藤政挙

内藤政挙は、1852年に掛川藩太田資始の子として生まれた。1862年、内藤

家七代政義の隠居にともない、八代目の藩主を襲封した。政義は大老となった井伊直弼の弟で、実家の彦根藩井伊家はこの年に「失政」により追罰を受けていた。延岡藩は、南九州における唯一の譜代大名という、非常に特徴的な藩だったが、中央政局に進出した薩摩藩の様子をうかがいつつ、禁門の変や第二次征長の際に幕府軍に参加し、鳥羽・伏見の戦いの際にも大坂の野田口を守備し、一時は新政府軍により征討の対象に扱われた。

1871年(明治4)7月14日、廃藩置県が断行され、旧藩主は東京に集められる。政挙も9月に上京して慶応義塾に入校したが、眼病により翌年に中退している。しかし、学問に対する情熱は衰えることなく、藩校を再編した亮天社の拡充を通じ、旧藩領における近代教育の展開を主導していくこととなる。1884年、華族令により政挙は子爵に叙せられる。その後、1887年に華族の地方移住が認められ、1890年に政挙は延岡に帰郷し、以後は1927年(昭和2)5月23日に逝去するまで延岡の発展に尽力する。

家令たちの記録

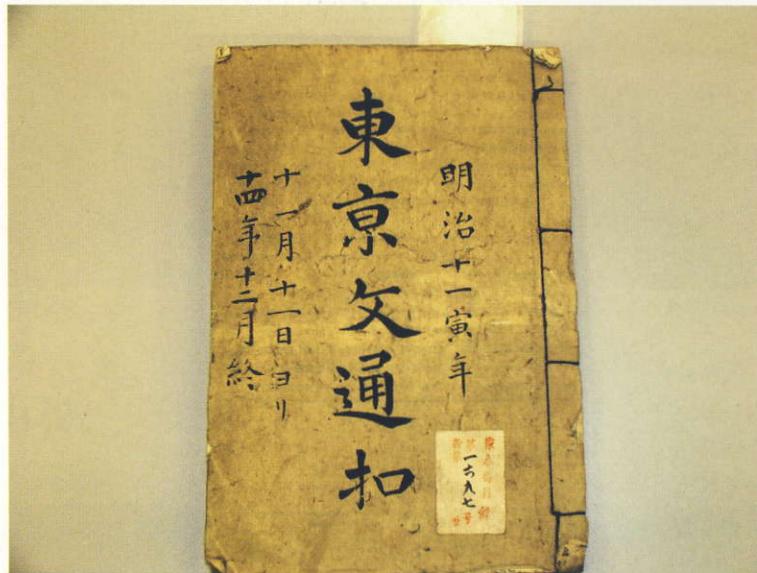
今回、新しく整理された近代史料のうち、根幹をなすのは東京と延岡に置かれた内藤家の家政機関の間で交わされた文書を記録した「家令局往復」であろう。

「家令局往復」は、延岡の遠山貞一・川名金蔵・松井一・曾根富弥などから東京に送られた「東京文通」と、東京の赤星拙道・羽田三蔵・丹野祐孝から延岡に送られた「東京御用状」、「東京来状」からなる。時期が最も古い史料は、1878年



内藤政挙公像(延岡城跡地)

(明治11)11月11日からの「東京文通控」で、冒頭に西南戦争の罹災者に対して内藤家が支給した救助金の配当が記されている。80年には、西南戦争の際に「西郷札」で上納された作得米があり、再請求は行わず損失として処理する方針が東京に報告されている。薩軍に協力した延岡隊の戦死者遺族や服役者家族への助成を示す記録もあり、西南戦争の影響が様々なかたちで旧藩領に残ったことをうかがわせる。1881年(明治15)1月6日からの「東京文通」では、同年に起きた旧延岡城下の大火が報告され、松方デフレが激化した1884年には、「延岡士族モ困苦ニ差迫、三度ノ食モ全カラザルモ大凡七歩通ニ可有之候」との報告が東京へ送られている。また、「明治二十三年東京状」は、政挙公



延岡の様子を伝えた「東京文通控」

の延岡移住に関する記録が豊富に含まれている。1885年(明治18)1月23日からの「東京御用状」は、1888年6月時点の内藤家所得金高が記録されているが、華族が主体となって設立された第十五国立銀行の純益金と、日平銅山など実業の収益が高い比重を示しており、内藤家が資本家としての基盤を構築したことをうかがわせる。このように、家令局往復は内藤家の家政や延岡の様子を総合的に把握できる貴重な史料であり、今後入念に検討を加えていきたい。

あわせて、明治後期から昭和初年まで内藤家を支えた家令小林乾一郎に関する文書も多数残されており、近代における旧藩主家の運営や、旧藩社会との結びつきを考えるうえで、非常に貴重な研究素材になると思われる。

内藤家の事業

内藤政挙は、前述のような旧藩士族の困苦に加え、恩師である福沢諭吉の「旧藩主旧領地に帰住す可し」という議論に刺激され、政挙は1890年(明治23)に、「専ら家産ノ事業ニ従事シ、永遠ノ基ヲ固フシ、旧藩士民ノ産業ヲ奨励シ、教育ノ道ヲ謀」ることを理由に延岡に帰郷した。1887年前後に多くの地券が蓄積され、内藤家が他の旧藩主家と同様に土地集積を行ったことがわかるが、一方で1894年に技師の笠原鷺太郎を招いて日平鉦山の事業を拡大発展させ、さらに電力事業や林業にも着手した。鉦山は鉦脈の欠乏によ

り1918年(大正7)に閉山したが、電力部門は1930年に九州水力電気と合併するまで拡大する。こうした内藤家による事業は、1923年に野口遵が日本窒素肥料延岡工場を創業する呼び水になり、今日の旭化成へと展開していくが、得られた収益は蓄財や投機ではなく、教育事業に高い比重で割り当てられたのも特徴的といえるだろう。亮天社は1899年(明治32)に県立延岡中学校設置に伴い閉鎖されたが、併設された女兒教舎は延岡女学校、延岡高等女学校と拡充され、地域における女子教育に多大の貢献を果

たした。また、奨学貸費生の制度も設けられ、進学支援は積極的に行われた。こうした内藤家の事業内容を詳細に伝える報告書や帳簿の分析も、近代における延岡の発展を考えるうえで不可欠といえよう。



日平鉦山の鉦滓を混ぜた「からみ煉瓦」の堀(亮天社・延岡高等女学校址の岡富中学校)

激動の陶磁器市場

赤津焼（愛知県）の調査・研究からわかったこと

外山 徹（商品部門学芸員）

2006年6月に商学部・大学院商学研究科との連携事業として開催された、伝統的工芸品の産地から講師を招いての公開特別講義における加藤裕重氏（赤津焼）による報告から、近年の伝統陶磁器の流通・販売をめぐる状況の大きな変化が明らかになった。

かつて、1995、96年と産地実態調査を実施したことのある赤津焼（愛知県）であったが、当時もバブル経済崩壊後の景気後退局面において、販売の伸び悩みと将来の不安が聞かれたが、1991年度の統計で903百万円、1998年度の統計で587百万円あった販売額が2005年度の統計で200百万円まで落ち込んだ数値^{*}は、その予想以上に悲観的なものである。赤津焼が立地する愛知県瀬戸市の窯業は、古代の猿投窯における我が

国でも最古の高火度焼成陶器を発祥とし、以降、16世紀の後半に北部九州で唐津焼・有田焼が勃興するまでは、まさに日本の陶磁史の主役であった。その後、尾張徳川家の御用窯を勤め、高度経済成長期においても「織部」「黄瀬戸」で一世を風靡したその輝かしい伝統に比しての現状の落ち込みをいかに評価すべきか、翌年から本格始動したプロジェクトではその赤津焼を最初の研究対象とすることになった。

※数値は『全国伝統的工芸品総覧』による

流通システムの怪株

まず、赤津焼に限らず全般的な動向として浮かび上がったのは、流通システム



赤津焼の割烹食器（織部フタもの）

の問題である。かつては、メーカーから産地問屋が商品を仕入れ、消費地問屋に卸し、そこから百貨店はじめ小売の現場に商品が供給されるパターンが確立していた。バブル経済の崩壊後に流通は滞り、銀行の不良債権処理問題によって経済情勢が悪化した90年代末より状況は悪くなったと言われるが、最初に淘汰されたのは消費地問屋であった。消費地問屋の役割は小売現場における欠品補充であり、迅速な対応をするため大量の在庫を抱えていたが、商品が動かなくなるとそのダメージをまともに食らうことになる。問屋は不良在庫を忌避するが、必要な時に商品が揃わないという悪循環に陥り、流通経路の真ん中がスッポリと抜け落ちたような状況になった。こうした状況は1995、96年段階ですでに指摘されており、メーカーと小売現場あるいは消費者との直接取引が将来の主流となるだろうことが予言されていたが、それはまさしく的中することになった。このことは、マーケティング



愛知県瀬戸市赤津地区の佇まい



赤津焼の割烹食器（黄瀬戸どら鉢）



赤津焼の割烹食器（織部先付小鉢）

の方法として、従来経験したことのない新たな局面の到来を意味していた。

赤津焼の流通と1970年代のやきものブーム

「赤津焼」という、通商産業大臣(当時)による産地指定にあたって付された愛知県瀬戸市の中の1地区の名称を採った呼称の知名度はないに等しい。実際、プロジェクトにおける都内百貨店の店頭調査の結果からは、赤津焼を探し出すことすら難しいという結果が出た。それでは、今からしばらく以前には、赤津焼の東京都内への流通はどうなっていたのだろうか？むしろ、施釉技法の名称である「織部」「黄瀬戸」の方が通りがよい。実際、今日で言う赤津焼が高度経済成長期に首都圏の百貨店に進出した際にはその名称で扱われていた。

元来、尾張徳川家の御用窯を中心に、茶陶の他には厨房雑器類を生産していた赤津地区からは、1920年代半ば頃から割烹食器が全国に出荷されるようになったと言う。それまで、家庭用食器と言えば染付磁器の飯茶碗と小皿にすぎなかったものが、1960年代に入る頃には、国民生活のレベルも飛躍的に向上し、かつては高級料理店の占有物であった器が家庭用食器として受容されるようになった。その当初に中心的な存在であったのが赤津焼であり、その時代には東京の百貨店向けの出荷がひきもきらなかったと言う。やがて他の産地が市場に参入するようになり、結果的には初期の寡占状態は解消され、数ある産地の一つに落ち着くことになったと考えられる。

赤津焼が家庭用食器の市場に進出してしばらく経つと、やきものブームの時代が到来する。1970年代においては大手出版社からそれぞれ立派な陶磁器全集が

刊行され、また、安価なムック本の特集記事も数多く見られる。有田の関係者による大々的なキャンペーンの効果も指摘されている。経済成長が頂点に達し、石油ショックによってブレーキをかけられる時代であるが、環境破壊や公害病の発生などに社会的注目が集まり、その反動として古きよき日本の伝統文化が再評価された時期と言われる。通商産業省による伝統産業の保護振興が始まった時期でもあり、また、各地の工芸品がもてはやされるようになった背景として国鉄のディスカバー・ジャパンのキャンペーンが指摘されるなど、現代文化におけるひとつの画期となる時代として再評価がされる必要がある。

やきものブームの中でその主役を務めたのは、磁器で言えば有田の「柿右衛門」「鍋島」であり施釉陶器では「織部」「黄瀬戸」「唐津」「萩」であったが、それらは桃山時代の茶陶を源流とし、全般的に中国の影響が指摘される日本陶磁史において、すぐれて日本的な展開を見せた時代を映したものと評価されている。

今日における陶磁器市場の変化

80年代には、割烹食器を源流とする和食器に翳りが見え、“多用途”を特性とする新感覚の器が市場に現れるが、引き続き堅調を維持し、やがてバブル経済によって空前の好況を享受することになった。その大量出荷によって飽和状態となった市場にバブル崩壊が直撃し、今度は未曾有の不況を迎えることになる。90年代以降の伝統陶磁器業界の停滞に関しては、まだまだ多様な分析が必要である。まず、かつての高度成長期においては安い労働コストを背景に輸出品が競争力を持ったが、バブル経済を経て、状況は逆になった。労働コストの上昇は手工芸品の価格を引き上げ、よって、伝統陶磁器はそれ自体

高級商品となったのである。一方、中国をはじめ海外から輸入される商品は、国産の機械工業製品を圧迫するとともに、その低価格は陶磁器の値頃感に大きな影響を与えたと指摘される。全般的な消費力の低下により、「やきものでもよい」という需要を解消し、「やきものでなければ」というより少ない需要が残るのみとなった。実はバブル経済期の好況においては、前者が伝統陶磁器需要の多くを占めていたことに気付かされる。したがって、現在の陶磁器市場はきわめて趣味性の高い、愛好家による市場となっており、需要の総体が著しく小さくなっていることは止むを得ないことで、その状況をしっかりと認識した企業のみが今後の生き残りの権利を手に行っていると見える。また、インターネットの普及をはじめとする情報メディアの活用も重要なポイントとなるであろう。

産地規模が元々大きくない赤津焼にとって見れば、その低調の原因は、経済状況の悪化というよりは、自らが持てる付加価値を生かすきれないマーケティング活動の低調と言えらる。愛好家の市場においては、むしろアドバンテージを持つと思われる赤津焼の低迷は、新しい局面におけるマーケティング活動の再構築の必要を如実に示していると言える。

〈参考文献〉

- 赤津焼工業協同組合編『赤津焼伝統的工芸品指定・赤津焼工業協同組合創立十五周年記念誌』（愛知県陶磁器工業協同組合・赤津焼工業協同組合、1992）
- 上原義子・梅村晴峰・高橋昭夫・外山徹「伝統的陶磁器の販売戦略—赤津焼(愛知県)を事例に—」【明治大学博物館研究報告】13、2008）
- 外山徹「食器としての赤津焼の受容過程と流通機構に関する諸問題」（『明治大学博物館研究報告』14、2009）

江戸時代の測量術

「地方測量之図」の紹介から



卍老人筆(葛飾北斎) 中判錦絵一枚 嘉永元年 (収蔵品番号 錦絵-653)

江戸時代は、日本の地理学、測量術が大きな進展を遂げた時代で、江戸の終わり頃には、伊能忠敬が日本で初めての科学的実測地図である『大日本沿海輿地全図』を作製したことはあまりにも有名です。しかし、これまで伊能忠敬の功績や伊能図について紹介される機会は多かったものの、一方で江戸時代の測量の様子についてはあまり触れられてきませんでした。

そこで、今回は江戸時代の測量の様子を描いた、当館所蔵の嘉永元(1848)年作成「地方測量之図」と題された錦絵を紹介し、江戸時代の測量術に触れてみましょう。この錦絵の作成絵師は「応需 齢八十九歳 卍老人筆」と左下にあり、「卍老人」とは号を三十数度も変えた葛飾北斎最晩年の号です。この錦絵作成の翌年、北斎は江戸浅草にて亡くなっていることから、当資料は北斎最後の作品ともいわれ、現存品は非常に少ないとされています。

では、絵の内容をみていくことにしましょう。絵の奥側に青い海がみえ、手前側になるにつれ小高くなっており、北斎は沿岸地方を描いたようです。また、木々や野原、家屋が描かれたそこかしこでは、右上の表題に「測量之図」とあるとおり、役人たちが棒や様々な器具を用いて土地測量を行っています。そして、興味深いことにこれらの道具には、それぞれ名称が明示されています。つぎに、道具の役割に沿って、江戸時代の測量の仕方を見ていくことにしましょう。

まず、この錦絵では、人の倍ほどもある細長い棒が立っているのが目立ちます。これは「假標」と呼ばれる測量補助具で、長さ一丈三、四尺(約4m)の竹に、先に白布をはたきのようにつけ、まっすぐに立てることで測量の際の目印として用いました。また、現在の長定規といえる、長さ二間(約3.6m)の竹棒「間竿」や、縄に一定の長さ毎に目印をふった「水縄」「水杭」をメジャーのように使用して距離を計測し、その計測値や各種事項を「野帳」に書き込んでいます。そして、肝心の測量器としては「小方儀」「大方儀」を主に用いています。この「小方儀」「大方儀」は、最先端



小方儀



大方儀

かつ特殊な器具であるにもかかわらず、まるで北斎が実際に調査したのではないと思われるほど、細部まで描かれています。では、この「小方儀」「大方儀」はどのように使用され、当時の技術では何を測量することができたのか、二つの器具を拡大して紹介したいと思います。

まず、「小方儀」は、地面に突き刺し安定させて用いました。そして、常に水平を維持する上部円盤面に取り付けられた測量穴から、図のように覗くことで測量穴の的と測量対象物が重なる位置を探し、円盤面にある方位磁針をもとに対象物の方角を知ることができたのです。さらに、分度器と望遠鏡を取り付けるなどの更なる改良により誕生した「大方儀」は、方角に加えて対象物の高さ、距離を計測することができました。

さて、ここに紹介した測量器具のうち、伊能忠敬が「大方儀」を利用した記録はないものの、「小方儀」と同じ機能をもつ「小方位盤」、絵中その他の諸道具も使用していました。つまり、この錦絵は、錦絵が描かれた30年以上前の伊能忠敬による日本地図作製作業の様子を知ることができる資料でもあるのです。

では、こうした江戸時代の測量の様子を忠実に描いたこの錦絵は、こういった目的のために作成されたものなのでしょうか。絵中左上に、錦絵作成の目的が記されています。その文章によると、この錦絵は、陸奥盛岡藩士梅村徳兵衛重得が、関流算術の師である長谷川善右衛門弘と先代長谷川善右衛門寛の測量術がもたらした功績をたたえとともに、大橋文五右衛門敏之・森莊助英明・川原順左衛門忠正の3名が、このたび師から地方測量術免許を受けたことを世に伝え、初心者への測量術の手引き、見本となるため作成されたとあります。つまり、この錦絵は測量術を学ぶための導入書の役割をしており、測量器具に名称がふられていたのは、測量の実際の様子を学ぶための工夫として刷り入れられたからでした。

江戸時代において錦絵が果たした情報伝達の役割が、非常に大きな存在であったことはここで言うまでもありません。その中でも、この錦絵のように学術の伝播を目的として、これほどまで細部にわたって描かれた資料は珍しいといえるでしょう。この珍しき、江戸時代当時の導入書をもとに、現代人の我々が改めて学んでいくことで、江戸時代の測量の様子がより明らかになっていくことでしょう。

(小野 孝太郎)

平城宮の軒丸瓦

2010年2月、瓦研究者として知られる前場幸治(ぜんば・ゆきじ)氏より、明治大学に多数の貴重な考古資料が寄贈されました。それには5000点以上の瓦が含まれます。今回は、その瓦の中から「平城宮の軒丸瓦」を取り上げ、ご紹介したいと思います。

今年は平城京遷都から1300年目の年にあたり、これを記念して、当地奈良ではさまざまなイベントが催されています。平城宮の朱雀門や大極殿も復元されており、ご覧になった方も多かもしれません。大極殿は、天皇の即位や外国の使節との面会など、大切な儀式が行われた施設ですが、この建物の屋根には約9万7千枚もの瓦が葺かれています。大極殿、朱雀門のほかに、当時は朝堂院(政治施設)、内裏(天皇の住まい)、庭園(宴会施設)などの多数の施設があり、さらに多くの瓦が用いられていました。

下の写真をご覧くださいませ。2点とも平城宮の軒丸瓦(軒先を飾る、文様のついた丸瓦)で、蓮の花をあらわした文様がよく似ています。しかし、よく見ていただくと、周りをめぐる点(珠文)の数が異なり、その外側にあるぎざぎざの模様(鋸歯文)や、花びら(蓮弁)の感じも少し違います。当時、瓦の文様は木製の型(瓦範)でつけていますが、平城宮からは、軒丸瓦だけでも150種類ほどの文様が確認されており、とてもよく似たものも多数あります。

なぜ、「そっくりさん」がたくさんあるのでしょうか。奈良時代の瓦作りは、完全に手作業です。粘土を採り、砂を混ぜてこね、型を用いて形作り、窯で焼くという行程すべて、機械ではなく人の手で行います。古代の瓦作りの様子がわかる古文書(『延喜式木工寮』)からは、瓦作りの職人(瓦工)一人あたり、一日に軒丸瓦を23枚作るという決まりがあったことがわかります。ちなみに、軒平瓦(軒先を飾る、文様のついた平瓦)の場合は28枚、丸瓦もしくは平瓦の場合は90枚となっています。手間のかかり具合を考えて、作る枚数が決められていたようです。

平城宮にはたくさんの建物があり、多くの瓦が用いられていたことは先に述べましたが、それを用意するのに、一日に数十枚単位の生産量では、いったいどれほどの日数がかかるでしょう。できる限り早く作らなければなりません。そのためには、瓦工の人数を増やし、さらには製作道具も増やす必要があります。瓦範が多数作られた背景には、このような状況があったのかもしれませんが。また、ひとつの建物に、大きく異なる文様の軒瓦が飾られるのでは、見映えがよくありません。「そっくりさん」が作られたのは、このためでしょうか。つまり、複数の瓦工が、異なる瓦範を使って製作した軒瓦でも、よく似た文様であれば、屋根に葺いた時、美しい景観になるということです。多数の「そっくりさん」の存在は、作業効率と美観を求めた結果と言えそうです。

『延喜式 木工寮』には、形作る瓦の枚数以外にも、瓦工一人が一日に掘る粘土の量や、こねる粘土の量およびその際に混ぜる砂の量、瓦一枚を作る時に使う粘土の量、窯で瓦を焼く時に必要とする瓦工の人数や薪の量、焼き上げる瓦の枚数など、瓦作りの各段階における細かい規定が記されています。果たして、この通りに実際の瓦作りが行われていたかどうかですが、まず、神奈川県小田原市にある千代廃寺からは「石田(粘土)一斗加沙(砂)八升」と書かれた平瓦が出土していて、製作現場で粘土と砂の配合比率が意識されていたことがわかります。また、藤原宮や平城宮などから出土した瓦には、「十」や「三」といった漢数字が書かれたものがあり、恭仁宮からは瓦工の名前がしるされた瓦が出土しています。これらは一人の瓦工の生産量を把握するためのものと考えられ、しっかりとした管理システムのもと、瓦工が作業に従事していたことをうかがわせます。古代の瓦職人は、管理され、いい仕事を求められていたのです。古の工人を思いながら、古瓦を見るのもまた一興かもしれません。(森本 尚子)



複弁蓮華文軒丸瓦 (平城宮、奈良時代)

第1回学術シンポジウム開催

今春、明治大学博物館と南山大学人類学博物館との相互交流の協定が交わされました。そこで、本誌では今後、学術相互交流の様子を連載でお伝えしていく予定です。

学術交流の第一弾として、7月31日には明治大学アカデミーコモン2F特設会場において、第1回学術シンポジウム「ホンモノ/ニセモノの論理—「文化の真正性」と博物館資料—」を開催しました。

シンポジウムの基調講演では、矢島國雄氏（明治大学文学部教授・学芸員養成課程）が、博物館資料に対する「ニセモノ」「ホンモノ」の捉え方について再考の必要性を訴えました。

休憩を挟んだ午後からは、第一部の問題提起として濱田琢司氏（南山大学人文学部准教授）が、モノの「価値」には揺らぎがあることを指摘し、事例報告として外山徹氏（当館学芸員）は、当館商品部門の前身である商品陳列館における「伝統的工芸品」収集の経緯を報告し、「伝統工芸」にまつわる定義の問題について言及しました。

つづいて第二部では、黒沢浩氏（南山大学人文学部准教授）が、資料に対する「文化的真正性」の実態は、他者による一方的な「仮想規範」によるものだと問題提起しました。そして、忽那敬三氏（当館学芸員）が贗物の銅鉾を事例に挙げて、贗物資料であっても見方を変えることにより、歴史資料として評価できることを報告しました。

全体討論では、博物館で扱う資料が真正か否かではなく、何を真正とするのかという博物館の視点を示すべきではないかという意見が参加者から寄せられるほど議論の高まりをみせ、今後の課題も浮き彫りとなりました。

次回の学術交流は、2011年1月、南山大学において行なわれる予定です。



黒沢氏による講演



異形銅鉾を掲げる忽那氏（事例報告）



全体討論の様子



博物館併設の図書室に関することを紹介する「図書室から」第三弾。今回は10月9日からの特別展に関連して埴輪に関する図書を紹介します。

埴輪の人物像は目と口がぼっかり開いていて、とぼけているような表情が魅力の一つです。動物もさまざまな種類がいて、見る人を楽しませてくれます。

10月9日から始まる特別展で公開される玉里舟塚古墳からも、多く人物・動物埴輪が出土しました。馬や盾と合体した人や、帽子をかぶった人、冠をかぶった人、お化粧をしている人など様々な埴輪があります。

約450年間の古墳時代、埴輪はどうして作られたのか、人物・動物埴輪にはどんな種類があり、帽子や冠の人はどんな身分で何をしているところなのでしょう。写真と文章で、その謎の答えを知ることができる一冊です。もちろん、玉里舟塚古墳出土の埴輪も掲載されています。

この一冊を読んだ後に特別展を観たら、玉里舟塚古墳に葬られた王の姿が見えてくるかもしれません。

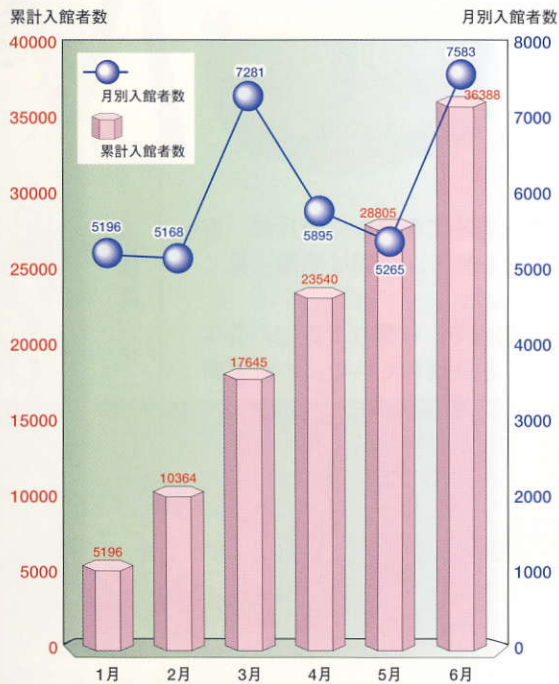
関連資料：望月幹夫 1995『器財はにわ』日本の美術 347 至文堂
：三輪嘉六・宮本長二郎 1995『家形はにわ』日本の美術 348 至文堂



亀井正道 1995『人物・動物はにわ』
日本の美術 346 至文堂
請求記号：P705/1//M
資料ID：1200990556

明治大学博物館入館者数の動き (2010年1月～6月：延べ人数)

2004年4月以降の総入館者数累計 360,887人



特別展来場者数内訳		開催日数	来場者数
1/15～2/14	全国大学史展 日本の大学—その設立と社会—	34日間	2504
3/3～4/25	新収蔵資料展 2010	54日間	4097
5/28～7/19	こ・と・わ・ざワールドへようこそ —時田昌瑞ことわざコレクション のすべて—	53日間	5379



「こ・と・わ・ざワールドへようこそ」展 内覧会

1月～6月	延べ人数
図書室利用者	1938
講座受講者	519

団体見学の記録 2010年1月～6月

- 【一般】 警察大学校特別捜査幹部研修所 (43名)・日韓市民交流研究会 (45名)・グループハート to Heart (47名)・板橋史談会 (40名)・社団法人日本セカンドライフ協会 (12名)・利根町歩く会 (100名)・つれづれ友の会 (34名)・東アジアの古代文化を考える会 (30名)・江戸東京再発見コンソーシアム (15名)・江東コミュニティカレッジ (27名)・ロシア・東ヨーロッパ学術視察団 (45名)・茨城県高萩市役所関係者 (15名)・桃園ことぶき会 (20名)・「クリオ」の会 (24名)・社団法人新宿区シルバー人材センター庭園・名所をめぐる会 (25名)・文京ふるさと歴史館友の会 (50名)・クラブツーリズム株式会社カルチャー旅行センター「やさしい考古学入門講座」 (11名)・グループタウンウォッチング (391名)
- 【小・中学校】 東京都あきる野市立一の谷小学校 6年生 (39名)・神奈川県川崎市立西生田中学校 (5名)・福島県いわき市立磐崎中学校 3年生 (4名)・宮城県石巻市立稲井中学校 3年生 (4名)
- 【高等学校】 高知県立高知西高等学校 1年生 (42名)・福岡県立筑紫中央高等学校 2年生 (45名)・和洋九段女子高等学校 (20名)・神奈川県立光陵高等学校 (70名)・千葉県立茂原高等学校 2年生 (42名)・韓国 仁川外国語高等学校 2年生 (74名)・神奈川県立逗子高等学校 3年生 (37名)・学習院女子中・高等科史学部 (18名)・神奈川県立新城高等学校 2年生 (30名)・湘南工科大学附属高等学校 (61名)・千葉県立千葉南高等学校 (38名)・神奈川県立横浜南陵高等学校 (30名)・千葉明德高等学校 1年生 (40名)・栃木県立栃木翔南高等学校 2年生 (40名)・神奈川県立秦野高等学校 (107名)・埼玉県立熊谷西高等学校 (111名)・品川エトワール女子高等学校 2年生 (26名)・千葉県立松戸六実高等学校 3年生 (8名)・成城学園高等学校 (13名)・長野県赤穂高等学校 2年生 (40名)・千葉県立船橋西高等学校 2年生 (50名)
- 【大学・大学院 専門学校ESPミュージカルアカデミーギタークラフト研究科 (19名)・外語ビジネス専門学校 (28名)・明治大学国際教育事務局 (200名)・東洋学園大学人間と犯罪ゼミⅠ・Ⅱ (25名)

M2 カタログ

ミュージアムショップ「エムツー」で販売しているグッズを紹介するこのコーナー。本号ではマグカップをご紹介します。

白い無地のマグカップ。アクセントとして土偶が浮き出ているのがポイントです。小ぶりのマグカップですので、デスクの上においても邪魔になりません。マイカップに土偶マグカップ、ちょっと人と差をつけたいあなたにオススメです。

セット販売も行っております。お友達とお揃いで使うのもいいかも!？ギフトにも最適な商品ですよ。

☆2010年1月～7月までのミュージアムグッズ売り上げランキング☆

1位 ボールペン(土偶)

2位 クリアファイル(考古)

3位 ボールペン(アイアン)



弥生文化研究会—楽しみながら弥生を学ぶ！—

2000年4月に発足、今年で11年目。現在のメンバーは17人。水田稲作の伝来から邪馬台国までを守備範囲とし、「楽しみながら弥生を学ぶ」がモットー。読んで学び、聞いて学び、見て学ぶことを実践。テキスト講読会からフィールドワークまでを駆使して、弥生の理論、遺跡、遺物に触れている。

「読んで学ぶ」

毎月1回、博物館の会議室でテキスト（現在は「弥生時代の考古学」を使用）に基づき、順番に報告を担当し、それぞれ自由かつ大胆な発想の意見を述べ、侃侃諤諤の楽しい雰囲気。

「聞いて学ぶ」

新しい企画。弥生研究のトップクラスの先生の話聞き交流しようというのが主旨。今年には石川日出志教授にお願いし、7月に「縄文から弥生へ」をテーマに講演をしていただいた。講演会は公開にしたから120人の参加者の大盛況。我々は、講演後、先生と懇親会をもち、自由な意見交換で先生からは、講演会では聞かれない秘話もお聞きし大満足であった。



会下山遺跡にて

「見て学ぶ」

- ① 毎年恒例の2泊3日の遺跡巡り。今年には5月に兵庫県南部の弥生時代遺跡。標高200mの高地性集落（会下山遺跡）や弥生から古墳時代をつなぐ墳丘墓（有年原・田中遺跡）などを見て、一同は感動。見てこそ学べることを実感した。
- ② 10月は石川教授のご案内で、日帰りで近辺の弥生時代遺跡と博物館巡りを計画している。これも新たな感動と、石川先生との懇親も楽しみである。
- ③ “明大博物館の弥生時代の遺物を制覇しよう”という企画を考え、来年3月には忽那学芸員に、過去明治大学が発掘調査した弥生遺物のうち第1回として「弥生前期・中期の土器」の実物観察と解説会を予定している。
バラエティーをもった研究会活動で、各イベントも全員で分担して楽しみながら、和気あいあいと研究会活動をしている。（磯辺 隆信）

【友の会 分科会紹介】

- ・古文書を読む会
- ・弥生文化研究会
- ・石器文化研究会
- ・古文書の基礎を学ぶ会
- ・平成内藤家文書研究会
- ・工芸の会
- ・草生水の会

【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

明治大学博物館 友の会宛

メールアドレス meihakutomonokai@yahoo.co.jp

※博物館事務室に、友の会の担当者は常駐しておりません。

連絡は必ずハガキまたはメールをお願いします。

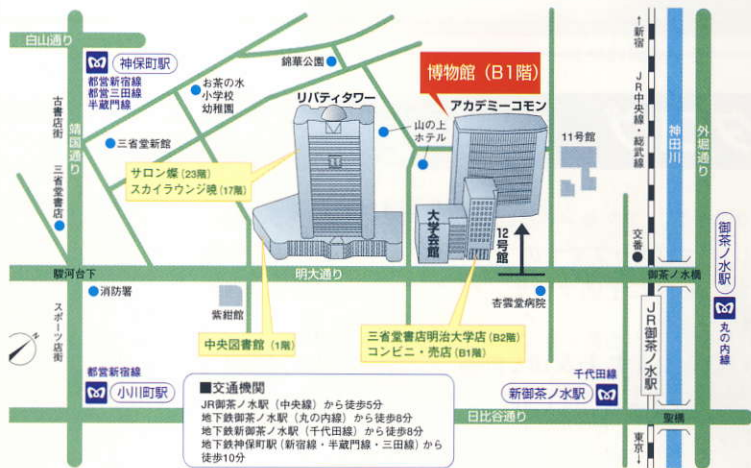
博物館案内

【博物館案内】

- ◆ 開館時間
10:00 ~ 17:00 (入館 16:30 まで)
- ◆ 休館日
夏期休業日 (8/10 ~ 8/16)
冬期休業日 (12/26 ~ 1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
※開館時間・休館日には変更場合があります。
- ◆ 観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

【図書室ご利用案内】

- ◆ 開室時間
月~土 10:00 ~ 16:30
- ◆ 閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は原則閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



編集後記：企画展「前場幸治瓦コレクション」が好評のうちに終了致しました。そして、10月からの2010年度特別展「王の埴輪」に先駆け、今号では4ページにわたり特別展特集を組みました。お読みいただき興味をもっていただけましたら、実際の埴輪たちに会いに明治大学博物館まで是非をお運び下さい。(お)